

---

# 濡れ衣

Shiena

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

濡れ衣

### 【Nコード】

N3707A

### 【作者名】

Shiena

### 【あらすじ】

誰も私の言葉を信じない・・・絶望の中で見た、今までとは違う世界。縁の無い事だと思っていた私に災難が降りそそいだ。暗闇のノンフィクション

## 【1話】

この小説は、実際に私が体験していることであってフィクションではありません

あなたは、誰からも信じてもらえなくなったことがありますか。

そして、その辛さを知っていますか。

大声で、「なんでよ」って泣き叫びたくなったことはありませんか。

私は今、やりきれない想いで身体が砕けてしまいそうです。

### 【一話】

2005年7月中旬。友達の手紙が来た。薄紫色の細長い封筒にそれは入っている

ました。ハルカには彼氏がいる。手紙の内容は、ハルカを傷つける言葉ばかりが書か

れていた。

パソコンで書いてあるこの奇妙な手紙が後の私の学校生活に大きな打撃を与えると

は、そのときの私には知るよしもありませんでした。

「トキ、私のロッカーにこんなの入ってた。」

ハルカが私に持って来た手紙には、  
「死ね　タクヤは私のほうが御  
前より好きだから」と、

書かれていた。これが一通目の手紙ではないらしい。一通目は下駄  
箱に入っていたそうだ。

「なんで・・・」

ハルカは困っていた。付き合いの順調だった私がこんなことになる  
なんて・・・瞳が、そ

う言っていた。

『なんだろうね、これ。誰だろう・・・直筆じゃないからわかんないね。』

慰めにはならないだろうけど、とりあえずそう言った。

手紙は次の日も、その次の日も、結局その日を境にほとんど毎日場  
所を変えて送られてき

た。私とハルカの周りにいる友達、男子3人、女子1人に、話はす  
ぐ広まった。そして当

然のごとく、【犯人を捜そう】ということになった。日に日に前の  
活発さをなくしてゆく

ハルカを見ていた私も、その考えに賛成したのだった。不公平な話だが、まずはクラスの

中で怪しそうな女子の名前を次々とあげていった。と言うのも、単に犯人の口ぶりが女子

のものだったからだ。そんなこんなで名前のががった女子は全部で10人。16人いる女子の

中で10人だ。あまり絞れなかったけれど、少しは進展があったよ  
うな気になった。ところ

がその後が行き詰ってしまい、嫌がらせに耐えられなくなったハル  
カはタクヤと別れた。

私は悲しかった。ずっと一緒にいて欲しかった。でも首はつつこめ  
ないと思った・・・

ハルカも辛いのだと。そのうち夏休みがきた。皆の記憶からあの事  
件が消えてしまったか

のように思えた。暑く長い夏休みは、いつもと変わらぬ毎日のよう  
に過ぎ去っていった。

## 【1話】（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

これからも書き続けますので、どうか見守っていてください。

感想などをもらえたら、支えにさせていただきたいと思います。

## 【2話】

夏休み明け。まだ暑さが残り、始業式を待つ教室は蒸していた。

ハルカとタクヤが別れた次の日、犯人からの手紙が届きました。

へやった やつと別れたね じゃあバイバイ

この手紙を最後に、ハルカへの嫌がらせは止んだ。タクヤは、別れを告げられるそのとき

までハルカが嫌がらせをうけていることを知らなかった。ハルカが止めたから。気の毒

だった。事情がよくわからないままの別れだ。辛かっただろうと。

それからというもの、少しずつ元の生活に戻っていった。皆はあのいまわしい事件をちゃ

んと覚えているのだろうか。忘れて欲しくない。親友の辛い過去を忘れて欲しくはなかつ

た・・・

そのとき、私はまだ知らなかった。決して終わつたわけではないのだということ。

皆が前のように笑っていた・・・

こんなこと、誰が予想出来たであろうか。

ことが再び起こったのは、このわずか2週間後のことでした。

2学期の中間テストが近づく。授業もテストモードに入り、学校生活に緊張感が出る。

それと共に私がどん底に突き落とされる日が、刻一刻と迫ってきていました。

「トキ中間の勉強やってる？」

『まあぼちぼち。相変わらずかな。テスト前にばあっとね。』

笑いながら私は言った。ハルカも笑いながら「私も」と答えた。平和……今なら

くさい言葉などとは思わないだろう。

数日後あつという間に中間テストの日が来て、これまた一息つく間もなくテスト期間

は終わった。木・金曜日と続いていたテストが終わった週の土・日休み。何の変わり

もないように思えた休日だが、このときすでにカウントダウンは始まっていた。そし

て悲劇の日まではあとわずか【2日】だった。

私はまだ

気づいていなかったんだ

【2話】（後書き）

引き続きこの小説を読んでくださった方、ありがとうございます。  
次話も、是非よろしくお願いします。

感謝をこめて      S h i e n a

### 【3話】

テスト明けの翌週、月曜日。何が変わることもなく一日が過ぎていくかのように思えた。

1時間目…… 2時間目と退屈で変わらぬ授業は終わっていった。でも……

もうこのときすでにカウントダウンは終わっていた。

「トキ。ちょっと話があるんだけど」

きつい口調だった。でもそれはあとから気付いたこと。私はまだ何も知らなかった。

『どうしたん？』

私は話し掛けるがハルカは答えない。そのまま下を向いて黙っているだけだった。

3時間目の授業の予鈴が鳴る

沈黙

数秒後、チャイムが鳴り響く

私は内心焦りを感じながらも校舎の外側の大きな壁の前にハルカと

座っている。

『どうしたの？』

もう一度聞くと、やっとハルカが重い口を開いた。

「最近、さ。また嫌がらせ始まってんだよね。今度はメールでテストの2日くらい前からんだけど」

私は空気をよんだ。ハルカが私に助け求めているのだと。でもそれは間違いだった。

「アドレスにね、【toki】って入ってたの。手紙のときに一緒に犯人搜した人達覚えてるでしょ。皆がトキのこと、”犯人だ”って言うてる。」

パツ。一瞬耐えられない程の光で目が見えなくなり、気付いたときには目を開けていても

閉じていても、景色の差は全く感じられなかった。

『今、なんて言った？』

聞き間違えたのだろう……。そう思ったかった。溢れ出てくる感情を抑えることが出来

ず、それがいつしか涙に変わっても止まることはなかった。

なんで・・・・・・・・・・

涙　哀しさ　抑えることの出来ない何か　犯人　【濡れ衣】ぬれぎぬ

頭の中をぐるぐると回る言葉たち　全身が激しく震え始める。

どうして？なんで私が？なんで皆そんなあからさまなこと信じるの？

『なん、で…私じゃないよ』

泣きたくない、泣きたくない、泣きたくない

どうして涙が止まらない

泣いたら負けじゃなか。弱いじゃなか。余計皆が疑うじゃなか。  
でも…………

”なんで…………？”

私は泣いた　　いっぱい泣いた　　止めることなど、出来なかった

そのうち3時間目の授業も終わり、結局まる1時間授業をサボって

しまった。

その場で泣き崩れてしまった私は、犯人にされているという事実以外何一つくわしい事

を聞いていなかった。だから、最終的に4時間目の授業も出ないで状況を聞くことにし

た。

ハル力は優しかった。

「出ているのはトキの名前だけだし、これって言う証拠があるわけでもないから、私は

半分疑って、半分トキのこと信じてる。」

ハル力は優しかったのだ。たとえそれが偽りの優しさや笑顔だったとしても、そのとき

の私に疑う余裕なの1mmの隙間だってなかったのだから。

**【3話】（後書き）**

読んでくださった方、ありがとうございます。  
頑張って書きますので是非感想をください。

## 【4話】

4時間目のチャイムが鳴る。

もう私は焦らなかった。

泣いてもいなかった。

ただ、ハルカが話すのをひたすら聞いていました。

「さっきも言ってみたように、メールが着始めたのはテスト2日前。つまり11月28日から。」

それで少しずつ皆にもメールが送られていって、結果的に今みたいな状況に着いた訳

なの。」

なるほど。私の中で少しずつ整理されていった。つまり、11月28日からメールが始まり、

最初はK君に、次にY君に、それからタクヤに、そして最終的にハルカとの直接対決と。

犯人は、誰にメールを送るときにも「トキです アド登録よろしくね」と文章の一番

最後に付けていたらしい。そしてそのアドレスのまま、ハルカに嫌味を言っただけらしい。

ハルカだけじゃない。K君も、Y君も、タクヤもそいつにいろいろ

と言われたらしい。

K君は私のことを「殴ってやる」って言っていたそうだ。

はは。殴る？笑っちゃう。男が女に殴るって言った。私はこの状況ながらおかしい話だと思

った。

私は殴られてもいいと思っていた。むしろ、やれるもんならやってみればいいとまで思っ

ていた。私は知っている。そんなの口先だけだっていうこと。いかに世の男が格好つけて

いるかがこれではつきりと証明された。そう、数学のようにね。

話を聞いているうちにだんだんとむかむかしてきました。

なぜなら、私のことを「犯人だ！！」と断定出来る証拠が何一つないからだ。

でもそれは私にしか言えないこと。皆はあのアドレスが何よりの証拠だと言っているのだ

から。あのあからさまに私の名前が入れたアドレスを信じて・  
・

こうして4時間目の授業も終わり、敵の待つ教室へと戻ることになった。

#### 【4話】（後書き）

読んでくださっている方、ありがとうございます。  
皆さんのおかげで最近少しずつアクセス数が増え  
てきています。これからも頑張りますので、感想・  
アドバイス等よろしくお願いします。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【5話】

冷たい視線が私の身体を突き刺す

皆が私を見ていた

でも皆ではないのだ

ただ、そう思えてならなかった。

さっきの強気な気持ちはどこへやら、私はぺしゃんこに押しつぶされていた。

私は顔を上げることが出来なかった。

自分が悪いことをしているわけじゃないのに、後ろめたかった。

これから毎日、毎日こんな風になるのかな・・・・・・・・・・

5・6時間目は、目からタオルが離せなかった。

涙が後から後から出てきてどうしようもなかった。

だけど、誰にも泣き顔は見られなかった。

だから声を押し殺して泣いていた。

それから私は、私でなくなった。無意識のうちに机につつぶして、休み時間には

本を読むか漢検の勉強に明け暮れていた。

暗い雰囲気を放っていたからなのか、大切な友達がひとり・・・、またひとりと去り、

私はクラスで独りになった。

ある日の夕方、久しぶりにA子にメールを送った。

「なんで最近話しかけてくれないの?? (T\_T)」  
すぐに返信が返ってきた。

『別に。なんもないけど』

冷たいメールだった。明らかに前の態度とも違っていた。

私は引き下がらなかった。

限界だったのだ。もう、独りでいるのは嫌だった。

「なんもないんだったらなんでそんな冷たく話すわけ??? おかしく

ない？

なんかあるんだつたら言えればいいじゃん。」

怒りを抑えることが出来なかった。

どうして私だけ？？私だって普通に生きていいはずでしょ？

こんなの・・・絶対におかしい。

しばらく経ってから返信が来た。

『じゃあ言うけど、あたしさあハルカが手紙で嫌がらせされてたの知ってたのお。』

それでK君に”犯人って誰？？”って聞いたら【トキ】って言うてたん。

それであんたのこと信用出来なくなった。

今回のメールもトキがやってんでしょ？』

絶望的だった。まさかA子にまで事件のことが伝わっていたなんて。しかも私のことを

”犯人”だつて言いふらしてた奴がK君だったなんて・・・

呆然とした。ただ、「信じて欲しい」という想いだけが私のことを強く叩いた。

私はすぐに返信を送った。

「違う、私じゃない。」

どんなに信じてもらえなくても

「A子が知ってることは全部誤解だよ。」

どんなに傷つくことを言われも

「最初から話したいけど…メルだと長くなるの。だから今から電話していい?」

それでも……信じてくれる誰かが、私には必要でした。

## 【5話】（後書き）

読んでくださっている方、ありがとうございます。  
引き続き頑張りますのでよろしく願います。

想像しながら読んでいただくと、よりという状況  
なのかわかりやすいかもしれません。

それでは、次話も是非読んでくださいね。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【6話】

「最初から話したいけど…メールだと長くなるの。だから今から電話していい??」

彼女は即答で返信をよこした。

『無理。今家庭教師来てるから』

悔しかった。

だから親指をフルに動かして急いで返信を送ろうとしていた……

そのとき、電話の呼び鈴が鳴った。

「もしもし」

『もしもし、A子ですけど……トキいますか??』

突然かかってきたA子からの電話。あんなに不機嫌そうに『無理』って言ってたのに。

「あの……私だけど」

震えてしまう声をなんとか抑えながら言葉を放つ。

『お母さんから聞いた。さっきトキ電話くれたんでしょ？返さなきゃ悪いなと思って……』

そう、私はA子とのメルが一瞬途切れたときに、一度A子の自宅に電話をしていた。

そのときはA子のお母さんが出て、”今家庭教師やってるのよね”と言ったから、

私は折り返し電話をくれるように伝言を頼んだ。

おばさんは、ちゃんと伝えてくれたのだった。

「そ、か。ありがとう。でも、どこから話せばいいのか……………」

そこまで話すと私は泣き出してしまった。

喉の奥から嗚咽が漏れてきて、うまく声が出せない。

話そうとするとしゃくりあげてしまい、言葉にならない。

今しか伝えるチャンスは無いのに…………

早く泣き止め。早く　早く　早く

自分を叱りつけながら必死で平常心に戻そうとする。

さすがのA子もこれには驚いて

『トキ?どうしたの??ねえ!泣いてちゃんわかんないでしょ?トキ、ねえどうしたの?』

さっきの態度が嘘だったかのように、A子は必死で私に呼びかけてくれた。

A子も・・・少しべそをかきながらの言葉だった。

しばらくして少し落ち着いてきた。

そして、私は話し始めた。

「さっきメルで手紙の頃の嫌がらせは知ってるって言ってたでしょ？」

あの頃私もさ、必死になってK君とかY君とかハルカと犯人捜したんだよ。

でも結局犯人は見つからなくて、そのうちハルカ達も別れちゃって・・・

私すごく悲しかった。

それでも、嫌がらせから開放されて、少しでもハルカが楽になったんだったら

それはそれでしかたないけどよかったのかなって思った。」

そこでまた涙がこみ上げてきた。私は深呼吸をして呼吸をととのえ、再び話し始めた。

「そしたら、今度はメルだって言ったでしょ。

もう本当に”なんでなの？”って思った。

メルの嫌がらせが始まったことは私12月5日の3・4時間目にハルカ本人から聞いた

のね。

で・・・その後私が犯人ってことになってるって聞かされて、

もう……

それで目の前が真暗で。気分も沈んだりして、ここ何日も暗い態度しかとれなくて。

それで……」

またうつとうしい涙が溢れ出てくる。

「それで……」

も、ごめんね。A子もなんでこんな急に变になったわけ？とか思ってたよね。

ごめんね。本当に、ごめんね。」

A子は事実を知った。そして今まで自分が私に対してとった態度を必死で謝った。

電話も最後のほうになると会話は少なくなり、”ふたり”で大声を上げて泣いていた。

”ふたり”で……

私は独りではなくなった。

勇気を出したことで、味方が出来た。

憂鬱な気分が少し晴れ、暖かな光が見えた気がした。

その日の夕飯は、すごくおいしかった。

## 【6話】（後書き）

読んで下さっている方、ありがとうございます。  
これからも書き続けていきますので、よろしく  
お願いします。

感謝をこめて

S h i e n a

## 【7話】

翌日学校に行くと、A子が「おはよう！！」と笑いかけてきた。

英語の授業では、抜き打ちのリーディングテストがあった。

1人ずつ文を読むのだ。

私が読み終わるとA子の番が来た。

A子は私の顔を見て、「わっかんないよね？」と言っているかのよう  
に苦笑いを

して見せた。私も軽く「うん、うん」と、笑いながらうなずいた。

また、少しずつ元に戻っていくんだな……と嬉しかったのを  
覚えている。

その日の帰りの会で、先生から話があった。

「えーつとですね、来週の金曜日に授業参観があります。

私達のクラスは理科をやるとのことです。

実験なので、第1理科室に移動してください。以上で、先生の話  
を終わります。」

授業参観……理科かあ。

悪くはないと思った。

なぜならその日、新しい友達が出来たから。

橋本さん。

特徴を言っと、ちょっと変・少しポツチャリ系・地味系・アニメ好き。

いわゆるハズレ組の子。

前の私だったら

「うわぁ、今日も暗いね。っていうかアニメの何がいいんかね。写し絵なんかして。

私絶対無理だわぁ。」

と、類友と笑っていただろう。

でもひょんなことから私達は仲良くなったのだ。

それはその日の昼休みにさかのぼる。

〳〳昼休み〳〳

私は1週間前からの日課で、今日も図書室に向かう。

うちの学校は給食を食べ終わるとすぐに昼休みになる。

だから、たいていは食べ終わってすぐに向かわないと窓辺のあったかい席に座れないのだ。

そして今日も私は図書室に向かう。

でもちょっと遅かった。いつもは私が座っている席に、今日は誰かが座っていた。

私がつかり。でもよく見てみると同じクラスの橋本さんだった。  
げっ・・・・・・・・

その頃の私はまだ橋本さんのことを毛嫌いしていた。だからあゝあとも思っていた。

でも図書室を見回すと、空いている席は橋本さんの隣の席しかった。

しょうがないか・・・・・・・・

そう思って橋本さんのところにゆっくりと歩いてゆく。

「ここ、空いてる?」

橋本さんは、突然声をかけられてびっくりしている様だった。でもしばらくしてから、

『うん、空いてる。どうぞ?』

笑顔でこう答えた。わりと普通だったことにただただ驚く失礼な私。

お言葉に甘えて

隣の席に座る。さっきの笑顔が嬉しかった私は橋本さんに話しかけた。

「なんの本読んでるの?？」

『これ?」天空の城ラピュタ”。知ってる??』

「そりゃあ知ってるよ!!宮崎 駿のやつでしょ?私もそれ好きでよくDVD見てたよ。」

『そうなんだ。いいよね、これ。』

「うん。いいよね、それ。」

私達はちよつと笑ってそれぞれのやりたいことをした。

私は持ってきたタオルを枕にお昼寝。

橋本さんはまた本に戻る。

そのうち5時間目の予鈴が鳴り、皆一斉に椅子をひいて立ち上がった。

そしておのおの取り出した本を元の棚に戻して図書室を去る。

私はすっかり熟睡していて予鈴の音に気がつかなかった。

そのまま寝ていると誰かの手が私の背中を軽く叩いた。

寝ぼけまなこで見上げると橋本さんがいた。

『予鈴鳴ったけど行かなくていいの?』

??????????

鳴ってたの?

私は大慌てで

「うそ、鳴ってた? 私全然気がつかなかった……熟睡してたし。」

「ごめん、ありがとう起こしてくれて。」

本当に助かった。何しろ次の授業は国語だ。遅れたりしたらとんでもない。

『ああ、全然(^^)じゃあ。』

「ちょっと待って! 一緒に行かない?? 同じクラスなんだし。」

『そうだね』

私達は前からの友達のように並んで廊下を歩いた。

3階に続く階段を駆け足で上がると、違うクラスの友達がいた。

私は少し橋本さんと離れた。橋本さんは他のクラスの子から見てもオタク系に見える。

本当のところ、そういう子と歩いてるのは恥ずかしかった。

ひそひそ話をされるんじゃないか。偏見の目で見られるんじゃないか。

私が以前やっていたように。

だから私は少し離れて歩いた。

今でも前から友達が歩いてくると少し離れてしまう。

そんな自分が恥ずかしい。

~~~~~

そんなこんなで私達は仲良くなった。

偶然なことに理科での席替えで私達は同じグループになった。

だから授業参観の教科が理科なのは悪くなかったのだ。

また、この頃になると担任の先生からは毎日のように心配の電話がかかってきた。

「はい、私は大丈夫ですから。」

私は毎回同じ言葉を繰り返した。

親にはこのことをまだ言っていない。もしかしたら授業参観で知られてしまうかも

しれない。心配でたまらなかった。怖かったのだ。なぜかはわからないけれども。

ある日の金曜日。またいつものように電話がきた。

『今日、大丈夫だった？早退しちゃったみたいだけど・・・ちょっと辛かったかな？』

内心「ちよつとじゃないし」と怒りながらも

「大丈夫です。」

といつも通りの答えを返す。でも今日の先生は引き下がらなかった。

『それでね、先生思っただけどそろそろお母様にもお話したほうがいいと思うの。』

どうかしら？』

これには参った。冗談じゃない。絶対に駄目。

返事をしない私に、先生は更に先を続ける。

『えっと、だからこれからあなたのうちに行こうかと思うんだけども・・・』

いいかしら？』

いいえ、よろしくないです！！私は心の中で悲鳴を上げた。

恐れていたことが起こる。今の時期、親に事が知れるのはやばい。  
1人いるお兄ちゃん

の受験シーズンだし。どっちにしても負担はかけられない状況だった。

「今……からですか??」

『そうよ。都合悪いかしら?』

「全部話すんですか?最近私が午後の部活に出ていないことも?」

そう、私はこのところ部活に出ていなかった。部長である私は練習メニューを部員達に

指示しなければならぬ。嫌な教室で、冷たい視線をたっぷり浴びせられた後に部活

へ出る気にはならなかった。そして早く家に帰って来ると、「今日も顧問風邪で休み

だった!監督できる先生がいなかったから今日も女テニは部活無しだったよ。」と、

お決まりの嘘をついた。だから先生にバラされるとバツが悪い。

『そうね、そういうことも含めてになるかしら。』

「そうですか……わかりました。」

そういうしかなかった。

いずれは、言わなくてはならないのだから。

ただその時期が早まっただけ。

『5時前には着くと思うわ。お母様によろしくね。』

「はい。わかりました。」

『それじゃ、後でね。』

「失礼します。」

こうして私達は電話を切った。

「おかあさん、なんかこれから鈴木先生来るって。」

結局私は唐突に言うことにした。

『どうして??.』

「んゝなんか最近風邪はやってるし、私すごく気分悪そうだったから心配して来て

くれるんじゃないの??ほら、今日早退とかもしたし。」

本当は違っけど、これが精一杯だった。

【7話】（後書き）

読んでくださったかたありがとうございます。

いよいよ親のほうも絡んできました。

次話は先生がうちへ訪問する場面が主な内容になる  
と思います。是非読んでください。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【8話】

4時55分。先生はまだ現れない。

忙しくて来られなくなったのかもわずかに希望を持ったその瞬間、  
「ピーンポーン」と、

インタ・フォンが鳴った。モニターを見ると鈴木先生がいた。当たり前だけれど……

私はがつくりと肩を落としながら玄関に向かう。ドアを開けたところに先生がいて

『こんにちは』

と、満面の笑みで言った。

「こんばんは」

と、私は答えた。

そして私のすぐ後ろからお母さんが出てきて

「先生、どうぞ。寒い中申し訳ありませんねえ」

と、おきまりのご挨拶。少し遅れてリビングに入るとお茶が出されていて、お母さん

が先生に向かいの席に座るように提案していた。先生はそれになら

い席に着く。そして

熱いお茶を一口飲むと話し出した。

『具合の方はどうかしら？よくなった？？』

最初、先生は話しを合わせてくれた。私も適当にあいづちをしたりして、あっという間に

15分が経とうとしていた。そして時計の針が5時20分を指そうとしたとき、いよいよ始まっ

た。

『それですね、今日ご自宅の方に伺いましたのにはお母様にお伝えしたいことがあります』

まして・・・・・・・・・・』

「なんでしょうか？？」

不思議そうな顔をするお母さんを横目に私は憂鬱な気分になる。

『だいぶ前頃からトキさんと同じクラスのハルカさんという子にいろいろと嫌がらせが』

行われていまして、最初は手紙での嫌がらせで始まりました。』

「はい、トキから聞いています。」

私が皆と一緒にになって犯人を捜していた頃、私は一度両親にこのことを相談してことがあ

った。とくにお父さんは精神科医でいろいろと良いアドバイスがもらえると思ったから・・

『そうでしたか・・それでですね、一時期それは止んだんですけども最近になって、

今度はメ・ルでの嫌がらせが始まってしまったようなんですね。ま、それでももちろん

アドレスというものが必要になりますよね？そこに問題がありました、そのおアドレス

の中に【toki】とまあトキさんの名前が入れられておりまして、それで現在犯人という

かたちになってしまってますし、トキさんのほう毎日大変苦しい学校生活をしているんですよ。』

お母さんは冷静に事を受け止めているようだった。首を縦に振って状況を把握しようとし

ていた。

『それで、トキさんはお母様にこの事が知れるのをすごく嫌がったんです。でも今日は

辛くて早退してしまったようですし、もうこれはお話ししなければと思います。』

ああ・・・・・バレてしまった。今日の早退の理由まで喋られ

てしまうとは盲点だ

った。でも仕方ない。あの日以来、私はいろんなことをあきらめてきた。今さら何かを

知られてしまったところで、状況は1mmだって変わらない。

## 【8話】（後書き）

更新が遅れてしまつてすみません。そして、読んでくださっている方ごめんなさい。それから今後ともよろしく願ひします。次話も是非読んでくださいね。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【9話】

『ごめんなさいね、こんなに話してしまって。困らせるつもりはなかったんだけど...』

しばらくぼうつとしていたのだろう。先生が心配そうに話しかけてきた。

「いえ、大丈夫です。いつかは言わなきゃと思ってたんで。」

しばらく沈黙が続いた。誰も何も言わなかった。5分が経ち、最初に口を開いたのは

お母さんだった。

「トキ、前に手紙のことお父さんに相談してたでしょ？あの夜トキが寝たあとね、お父

さんが私に言ったの。【そういうことをやってる奴の気はおかしい。今はハルカちゃんに標的になってるが、もしかしたら今度はトキにまわってくるかもしれないぞ】

ってね。」

知らなかった。お母さんは何故そのことを私に教えてくれなかったんだろう.....

でもその謎はすぐに解けた。あのとき、もしお母さんが私にこのことを伝えていたとし

ても、私は反発して言うことをきかなかっただろう。その頃、ハル力は私の親友で、人

付き合いが苦手な私にとっては唯一心を許せる友達でもあった。だから見捨てるなんて

そんな冷たいことは出来なかった。もつと言えば、ハル力を失うのが怖かった。無責任

な人だと思われなくなかった。だから私はきつと言うことをきかなかっただろう。

「そんなの・・・今言われてもどうにもなんないじゃん。」

別に責めているわけではない。ただの本心だった。でも一度喋り出すととまらなかった。

「私もう学校行くのやめる。行っても意味ないもん。冷たい視線だけ浴びてさ、なん

の得があるわけ??学校って勉強しに行くところでしょ?私このことのせいで授業も全

全頭に入らない。もう嫌だよ。」

いつの間にか泣いていた。声も身体も震えることなく。いつきに喋ると少し楽になった。

でもお母さんに悪いような気がしてならなかった。言い終わってすぐに自己嫌悪に陥っ

た。お母さんを傷つけたかもしれない。考えるだけで胃がムカムカ

してきた。

「でも学校行かなくなったら、【やっぱりトキがやってたんだ。だから学校来れなくなっ

たんだ。】って言われるかもしれないよ？そんなの負けてるみたいで嫌じゃない？」

親らしいことを言った。でも私はその言葉にむかいついてしまった。

「それでもいい。私が犯人って言うならそう思っていればいいもん。もう関わりたくない。

勝手にやってればいいじゃんって感じ。」

そこで今まで黙っていた先生が口を開いた。

『でもね、それじゃやっぱり悔しいわよ。トキさんは悪くないのに、やっていることを

認めてしまうことにもなりかねないのよ？』

まったくこの人は私がさっき言った言葉を聞いていなかったのだろうか。

「もう、それでもいいですよ。今私が何かを言って反論したところで、誰も私の言葉は

信じません。ただの言い訳に聞こえるだけです。それこそ墓穴を掘ることになります。

もうどうしようもないじゃないですか。本当の犯人が見つからない限り、手段はない

ですよ。それとも先生が全部解決してくれるんですか？」

私のこの挑戦的な態度に先生は口を閉じた。私も口を閉じた。

もう何も話したくなかった。疲れてしまったのだ。なんで何もして  
いない私がこんな大変

な想いをしなければならぬのだろう。怒りがこみ上げてきた。そ  
うよー！私は何も悪いこ

となんてしてない。なのになんでよ……瞬間的に怒りは沈んで  
悔しさという後味が残

った。

皆しばらく黙っていた。先生がうちに来てもう2時間が過ぎて  
いた。

このときも、最初に言葉を発したのはお母さんだった。

「先生、そろそろ遅くなりますので今日はこのへんにしましょう。」

先生は自分の腕時計に目をやり、『そうですね』と疲れたような目  
で言った。

『それじゃトキさん、明日学校で待ってるからね。絶対に来てくれ  
るわよね？先生信じて  
待ってるからね。』

私は返事をしなかった。

先生はなおもねばった。

『人の話を聞くときは？なんだっけ？』

この状況でそんなこと言ってられる場合じゃないでしょ。そう思いながら私は顔を上げら

れないでいた。

先生はあきらめて

『じゃあ明日学校でね。』

と言った。それからお母さんに向き直って

『それでは夜分遅くまでお邪魔いたしました。』

こうして先生は帰って行った。

私は自分の部屋にこもって泣きはらした

悔しさと寂しさとやりきれない気持ちを抱いて。

そして、眠りに落ちた。

夢の中でも、私は泣いていました。

## 【9話】（後書き）

更新が遅れてしまつてすみませんでした。  
調度修学旅行に行っていたもので・・・  
読んでくださった方ありがとうございます。  
次話も読んでくださいね。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【10話】

目覚まし時計がけたたましく鳴る。

冬の刺すような寒さに耐えながら1階におり、真つ先に洗面所にむかった。

軽く歯を磨いて、それから鏡の中の私に目をやる。

そこには右瞼の腫れた自分の顔があつた。

「やっぱり……………」

ぼつりとひとり言を言いながら右目をこする。

それから朝のシャワーを浴びて髪をとかした。ゆるやかなウェーブがかかった長い黒髪が

肩に広がった。ひとつため息をついて服を着る。いつもと変わらない朝。だけど学校に行

くのが憂鬱だつた。食欲の湧かないままトーストにバターとイチゴジャムをぬり一口食べる。

いつもと変わらない朝なのだけれど。

学校に着く。3階までの階段はきつく足がくたびれた。教室に入ればおきまりの5人は私

を睨む。またひとつ大きなため息をついて、私は自分の席に座る。予鈴が鳴り、皆慌しく

教室に駆け込んできた。私は机につつぶしてその足音に聞き入っていた。

そういえば明日は授業参観だった。もうすぐ修学旅行があるため、保護者にむけての説明

会も兼ねていた。授業の内容は前にも書いたように理科の実験だった。

翌日になって今日はいよいよ授業参観。5時間目にやるのだ。私は嫌だった。理科が嫌い

なわけじゃない。ただ、元気をなくした自分をお母さんに見られなくなっただけだ。

午前中の授業はあっという間に過ぎ去っていった。給食の時間は短く、これまたすぐに終

わった。その日は休み時間がなく、片付けが終わると私は誰よりも早く教室を出て理科室

にむかった。ハルカの後ろは歩きたくなかったのだ。ぬかすにぬかせないし、万が一後ろ

を振り向かれてはバツが悪い。

5時間目の授業はすぐに始まった。

へ起立、礼【おねがいします】、着席

理科室にはちらほらと保護者の姿が現れ始めた。私はそれを気にしないように努めて実験

に没頭した。

1時間というのはとても短い時間だった。授業の終わりを告げるチャイムが鳴り、皆一斉

に教科書やノートをばたばたとしまふ。

へ起立、礼【ありがとうございました】

男子は我先にと狭いドアにむかって猛ダッシュ。女子はそれよりも一足遅く席を立ち理科

室を出る。私は残り2・3人しかいなくなった理科室をゆつくりと後にした。

今日は部活がない。保護者会があるからだ。私はほっと一息つく。休む時間が欲しかった

から。

その日結局お母さんは授業を見に来なかった。くわしく言えば、教室で鈴木先生と事件の

ことに関して話をしていた。この頃、2組の教室にはいつも誰かしら先生がいた。なぜな

ら、調度3日程前から今日まで、ハルカの私物が次々とずたずたに切り裂かれていったか

らだ。マフラー、部活のユニフォーム、教科書、体育着、ウィンドブレ・カ・など。最後

の二つに関しては切り裂かれたわけではなく、赤いマニキュアで「久しぶりだね」と書い

てあったり、べたべたに塗りたくられたりしていたそうだ。そんなこんなで今の状況をお

母さんに説明するべく教室にいたわけだった。その頃、私はまだ何も知らなかった。これ

からの犯人特定への自分の思考が、あの一言で大きく変わろうとし

ついでに・・・

## 【10話】（後書き）

毎度読んでくださっている方、  
ありがとうございます。

このつど『濡れ衣』へのアクセス数が100人を超しました。愛読者の皆さん、本当にありがとうございます。まさかこんなにもアクセスしてくださる方がいるとは思っていませんでした。これを支えにこれからも頑張るので、よろしく願います。次話では私の思考に変化が起きます。是非読んでください。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【11話】

今日は一段と疲れた。神経を使い過ぎたのかもしれない。

今私は自分の部屋にいる。しばらく眠っていたようだ。空はやかに暗さを増し、

次期夜が来ることを告げていた。そのとき、玄関ドアの開く音がした。お母さんが

帰ってきた。私はすぐ下におりていった。

「先生なんだって？」

気になってしょうがなかった。一体どんなことを話したのか……

「うん。そうねえ……」

お母さんは言葉を選んでいようだった。でもそんなのは嫌だった。私が受けていること

なのに、なんで私に知る権がないの？

「早く。」

ついぶっきらぼうな声を出してしまう。

「うん、今日先生にね、詳しい今の状況を教えてもらってたの。物

が切られたこととか

むこうの親御さんがどう言っているかとか、いろいろとね。それから……」

お母さんは何かを言いかけた。だが少しためらって言葉を切った。

「それから？」

とうながした。言いかけたことは言っていて欲しかった。しばしの間があつてから話始めた。

お母さんの口から出た言葉に、私は啞然とした。

「ついさっきのことなんだけど……理科室に移動するとき、最後まで教室に残ってたのが

ハルカちゃんと例の５人組の中のＹ君だったんだって。それから先生もね。そしたら

ハルカちゃんがいきなり【キャー】ってすごい悲鳴あげたらしいの。っていうのもう

しろのロッカ－に教科書をとりにいって、そのあと自分の机の上にある筆箱をとりに

きたら、机の上に折られたカッターの刃が置いてあったんだって。それでそれを持っ

てすぐ先生のところにきて、【先生、こんなものが私の机の上に……】って。

でも……先生の話によると、ハルカちゃんがそのカッターの刃を持つてくるまで机の上

には何も無かったんだって……」

なんだって？という意味？混乱してしまった。そんな頭でひとつ

だけ濃い思考が浮か

んでいた。

．．．．．【自作自演】．．．．．

「何それ？それって今までの全部自分でやってたってことじゃん！  
は？意味わかんない。

なんで今まで気がつかなかったの。手紙の嫌がらせの頃だって、  
いつだって一番最初

に手紙を見つけたのはハル力だったのに．．．．」

もお、なんでよ．．．．

そのとき、電話が鳴った。

「もしもし。」

『もしもし、鈴木ですけど．．．．今話せるかしら？』

電話は、鈴木先生からだった。

## 【11話】（後書き）

読んでくださっている方、ありがとうございます。

11話は少し展開があつたと思います。

引き続き次話も読んでください。

感謝をこめて

S h i e n a

## 【12話】

「はい、大丈夫です。」

『そう、よかった。とくに何かあるわけでもないのだけれど、今日  
はむこうの親御さん

も授業参観見に来てたでしょ？それで、大丈夫かなと思ったの。

その、嫌な視線を浴

びたんじゃないかって・・・』

はあ・・・

「大丈夫です。それよりお母さんに聞きました、カッターの刃のこと。  
先生はどう考え

てるんですか？私は自作自演だったんだと思います。」

単刀直入な私の言葉に先生はしばし言葉を切った。

『そうねえ・・・』

それだけ言うともた言葉途切らせた。

「どうなんですか？」

なおも聞くと先生は口を開く。

『そうねえ、先生にとってはトキさんもハルカさんも同じように生徒  
なの。だからこれっ

て言うことは出来ないわ。』

先生は無難なことを言った。先生の言う通り、確かに私もハルカもやっぱり同じように先

生の生徒。でも私は言うて欲しかった。『私もハルカさんが怪しいと思う』と。先生がハ

ルカの味方についているように思えてならなかった。

私は勇気を振り絞って訴えかけた。ここ何日かずっと言おうと考えていたことだ。

「先生、あの5人と話し合いの場をつくってください。今のところ私の発言権はゼロです。話をさせてください。私の気持ちをあの人達に伝えたいんです。」

今までの緊張が和らいだ。

でも先生の返事は冷たいものだった。

『でもね、むこうの親御さんが反対したら出来ないかもしれない。もう少し間を置いて、いいタイミングがきたらにした方がいいと思うわ。感情のぶつけ合いになったら意味がないでしょう?』

やっぱり先生はむこうの味方なの? 私の気持ちは?

「どんなにむかついても私我慢します。だからお願いです。話し合

いの場をつくつてく  
ださい!!」

いつのまにか私は泣いていた。とめどなく流れる涙のせいで声が震える。

「だっ……で、今……までも我慢してきたじゃ……ない  
ですか。」

ど、して話させてくれ……ないんですか？」

嗚咽が漏れて言葉が途切れ途切れになった。むせ返るような哀しみ  
と怒りが喉から這い登

ってきた。

気がつけば、私は声をあげて泣いていた。

先生は………何も言わなかった。

しばらくして、私から電話を切った。何も話したくなかったから。

でも犯人はわかった。少なくとも私にだけはわかる。私が犯人じゃ  
ないってことは

私以外の誰にも、今の段階では断言出来ない。明日からどんな顔で  
学校に行こう……

それに、ハル力はなんで私をはめたんだろう………

信じていた友達に裏切られるほど、心苦しいことはない。



【12話】（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。

今回は涙、涙という感じになってしまいました。

あのときのことは、今でも思います。（と言ってもそんなに月日が経ったわけではないので当たり前なのですが……）

次話も是非読んでくださいね。

感謝をこめて      S h i e n a

### 【13話】

翌日、学校に着いて教室に入る。

ドアの側にいた5人組が私を睨む。でも今日はそこまでじゃなかった。私からも睨み返し

たのだ。おまけに軽く舌打ちもいれて。しばし4人はあっけにとられていたようだった。

でもひとりは違うはずよね。ハルカ、あんたにならこの意味がわかるでしょ？

今日は1時間目の授業から理科だった。昨日に引き続きまた実験だった。もちろん移動教

室で、これまた当然のように私は一番最初に教室を出た。理科の先生は4組の担任で、4

組の朝の会は遅れていた。だから理科室の鍵はまだ開いていなかった。

しばらく私はひとりで壁にもたれていた。そのうち教室から出てきた人たちが理科室のド

アのところ集まりだした。そのうちハルカもハルカの友達のHちゃんと一緒に歩いてきた。

そして調度私とは向かい側の壁に寄りかかった。私の怒りはすさまじく、ハルカのことを

ずっと睨んでいた。そうこうして5分くらいが経った。それでも私は睨み続けた。そのとき

ハルカがふと私のほうを見た。私達の視線は宙でぶつかった。そしてそのときのハルカの

行動はあまりにも不自然だった。なぜなら私にむかってピースをしてきたのだ。私のこと

を犯人だと思っている人なら絶対にそんなことはしないだろう。この行動は、私のあの考

えを濃くするものとなった。

そういえば、もうあと3日程で冬休みだった。

話し合いの場はつくられないままだった。

3日というのはあっという間に過ぎていった。

今日からは冬休みに入る。今年の冬休みは憂鬱な気分のまま始まる  
うとしていた。

【13話】（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
次話も是非読んでください。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【14話】

冬休みももう5日経つ。

私はいつも家でボ・ットしていた。Christmasの予定もま  
るでない。それどころか、

やることさえないのだ。そんなとき、自宅に1本の電話がかかって  
きた。

「はい、もしもし」

電話に出たのは私だった。

『こんにちは、鈴木ですけれども……』

電話の相手は鈴木先生だった。

「こんにちは」

『お母さんいるかしら？』

先生からの電話といえばあの事件のこと以外内容が思い浮かばない。  
でも、電話に出たの

は私なのに、なんでお母さんにかわれなんて言うのかな。隠し事を  
されているように見え

てならなかった。その頃の私は何かあることに「私だけ知らないん

じゃないか」と不安を

つのらせていた。少しでもそういつそぶりがあると、過剰に反応してしまっていた。はた

から見れば、私の姿はとても不安定にうつっていただろう。

「はい、かわりますか？」

わかっていながらもそう聞いた。

『ええ、お願いしたいわ。』

そう先生が言ったから、2階にいるお母さんを大声で呼んだ。お母さんは階段のところま

でおりてきて、「ここまで持ってきて」と言った。私が電話を渡すと、それを持ってそのま

ま2階へ行ってしまった。

私が聞いてはいけないことなのだろうか・・・・・・・・・・

しばらくしてからお母さんが下におりてきた。電話はもう切られていた。

「先生、なんて？」

「明日の夜８時頃から、むこうの親御さんと先生方と私達で話し合  
いをする事になった  
の。学校でね。」

今お母さんは【私達】と言った。それは、まぎれもなくお母さんと  
”お父さん”のことだ

った。

私は手に汗をかいた。

どうしよう・・・・・・・・・・

お父さんには私が事件のことに巻き込まれていることを言っていな  
い。その頃は、な

ぜかはわからないけれど、「怒られる」と思っていたから。私のお  
父さんは私が怪我をし

ても、風邪にかかっても怒る。”自己管理がなってないから”と言  
って。だから今回もそ

う言って怒られるのではないかと思っていた。

「それ、お父さんも一緒じゃなきゃだめなの？」

私は少し涙声になりながら聞いた。

「うん・・・そうね。どこの家族も２人でくることになってるみ  
たい。なるべく多くの人

に聞いてもらわくちやいけないみたいだから。」

「お父さんには、なんて言うの？」

怖くてたまらない。

軽蔑の目で見られるかもしれないことを考えると、喉の奥が痛かった。

「ねえトキ、もう内緒に出来ないよね。そろそろ言わなくちゃ。ゆくゆくは知るんだから。」

それに今日言わなきゃ明日のぎりぎりに言っても、お父さん予定つけられないよ。」

「そっか・・・そうだね。わかった。」

もうしょうがなかった。言うしかないし、内緒にしておくことに疲れていた。怒られても

いい。状況がよくなるわけでもないのだから。

「事情を話すのはお母さんがやって。」

「わかった」

そんな会話が、音の無いリビングに冷たい波紋のように広がっていた。

【14話】（後書き）

今日は1日に2話も書いてしまいました。

もうすぐテストで投稿のペースが遅れてしまうかもしれないので・・・

読んでくださっている方、毎回毎回ありがとうございます。  
います。これからも読んでください。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【15話】

その日の夜遅く、お父さんは帰ってきた。

私はソファで寝ていた。

いや、寝たふりをしていた。

しばらくお父さんとお母さんは一緒に遅い夕飯を食べていた。

少し経ったところ、お母さんが唐突にことの事情を話し始めた。

お父さんは軽くあいづちをうちながら聞いていた。

お母さんは今までにあったことをお父さんにわかりやすく伝えようと事細かに話した。

私の脳裏に今までの辛いこと、前の楽しかった頃のことが出ぎった。知らず知らずのうち

に私の頬を冷たい水が滴っていた。どうしようもなく悲しくてしょうがなかった。

前の頃に戻りたくて、でもそれが叶うことのない現実は無意味さを見ていた。

私は、てっきりお父さんは怒鳴り散らすと思っていた。でもその考

えとはうらはらに不気

味なほどに冷静だった。そしてお母さんがひととおり話し終え  
るとお父さんは私の側に来

てこう言った。

【心配しないで、ゆっくり寝なさい。あとはお父さんにまかせて。】

私は寝たふりをしているのも忘れてうなずいて返事をした。

そしてその後私は本当に寝た。この先どうなるかもわからないけれど、とりあえずきざし

は見たんだと思った。

そして今は翌日の夜だ。

お母さんとお父さんは、今まさに学校へ出掛けようとしていた。

「それじゃ、行ってくるからね。遅くなるようだったら先に寝て  
るのよ。」

お母さんは私にそう言い聞かせて家を出た。

そして、時間というものは退屈で長いものだと知った。

その日、結局両親が帰ってきたのは真夜中の1時だった。

眠い目をこすって何か会話をしたような気もするが、全く記憶がなかった。

私は、そのまま眠ってしまった。

【15話】（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
これからもよろしく願いします。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【16話】

翌日の夜遅くに、私は昨夜の事の詳細を聞いた。

このときもまた、お母さんとお父さんは言葉を選んでいようだった。

「どうだったの？」

私が聞くと、お母さんは慎重に答えた。

「なんか前端的に”トキが犯人だ”って感じだった。Hちゃんの親御さんがね、”アドレス

の登録画面がもう割れてるんですよ。もう認めたらどうですか？”って。疑ってるんじゃない

なくて、断定してるって感じだったかも……」

そこまでひどいとは思わなかった。自分にも私と同じ年の子供がいるくせに、よくそんなこ

とが言えたものだ。

胸のあたりに、何やらもやもやとする感じが残った。

それから、冬休みの部活のときなど、幾度となく嫌な視線を浴びた。

その頃にはもうハル

力と同じ部活の人たちにもひどくのしられていた。ハル力は部活に来ていなかった。部

員の目が”あんたのせいだから”というように、私のことを突き刺した。

「なんで私がこんなこと言われなきゃなんないの……」

こんな考え、もう何回思ったかもわからなくなっていた。

陰愚痴を言っているつもりだったのだろうが、私には丸聞こえだった。

わざとそうしていたのか、そうじゃなかったのかは今でもわからない。

だけど、いろいろなことが積み重なって「学校に行きたくない」と思ったのはまぎれもな

い事実だった。

精神的に、すごくきつくなっていた。

そんな中で、冬休みももう終わろうとしていた。

日に日に憂鬱になっていった。

そうなってしまうことを止められるものは何もなかった。

冬休みの終わりが近づくと共に、修学旅行の日も近づいていてきていた。

行動班は、私とハルカがまだ仲の良かった頃に組まれた。だから行動班の女子はふたり。

私とハルカだった。それに、ついでと言うにはあまりにも大きなことで、今ハルカの周り

をとりまいて、何だかんだと”おまえが犯人だ”という視線を必要以上に投げてくる男子

のほとんどと同じ班だった。男子と女子が組むときはくじびきのはずだったのに、どう

してよりによってあいつらだったんだろっ……そう思ったところで今さらどうにもな

らないだろう。

始業式の日までの間、私はいろいろなことを考えた。

そして、その日は明日に迫っていた。

またあの学校に……………



【16話】（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
それから、最近ペースが遅れてしまってますみません。  
そうが見守ってください。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【17話】

始業式の日はあるという間に終わった。

3学期が始まって、今日でもう1週間が経っていた。

学校での状況は相変わらずだった。

そしてもうすぐ修学旅行がある。

行動班は先生の気遣いもあって、他の班に入れてもらった。

それだけで、充分恥ずかしい思いをした。

私は今回のこの修学旅行に行く意味を見出せないでいた。だから行かないつもりでいた。

こんなことがあって、あんな風にのしられて、犯人にされて、「何が思い出だよ」と

まで思っていた。私が行く意味はないと思った。私のその言葉に先生たちは『学年の全員

で行くのが修学旅行なんだよ』と口をそろえて行った。そんなの、肩書きにしか過ぎない

くせに。思いやりなんてないものだと思死で思っていた。優しさを信じたくなかった。

誰かに裏切られるのが怖かった・・・・・・・・

そんなこんなで私は自由行動の日のコース決めの話し合いに参加しないで、いつも寝てい

た。本当に何もかもがどうでもよくなるとはこのことだと思った。

そして日々は何につっかかることもなく過ぎていった。

気付けばもう2月になっていた。

あと少しで修学旅行・・・・・・・・・・私はまだ行くかどうか決めかねていた。

ある日、同じ行動班のSちゃんが言った。

> 一緒に行こうよ。一番辛いのはトキかもしれないけど、行かなきゃ損するかもよ？<

なんてことないこの一言に、なぜか私の心は動かされた。

行こっかな・・・・・・・・そんな風に考えることが出来た。

そして、今日は修学旅行の2日前だった。

この日、お母さんの一言であの事件に大きな変化が起きた。

## 【17話】（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
次話で変化が起きます。  
是非読んでくださいね。

感謝をこめて

S h i e n a

## 【18話】

その日学校から帰ると、お母さんは何やら誰かと電話をしている最中のようなだった。

チラッと横目で見るとまた視線をどこかへそらし、ただ黙って電話の向こうの人の話に耳

をかたむけていた。もう10分くらいだっただろうか。長いなと思っていたときお母さんは

電話を切った。そしてそのまま黙っていた。

「どうしたの？」

そう聞くと、今耳にしたことがあまりに待ち望んでいたことで現実味がないとでも言うよう

うな様子で私を見た。

「犯人、警察に捕まったんだって……今日、その親子が警察署に呼ばれてすごく怒られたらしいよ。」

そこまで喋ると、お母さんは口を閉じた。

涙が出てきた。

たくさんの方が思い出された。

そしてハルカが犯人かもしれないと知った日のこと。

さんさんののしられ、陰愚痴を叩かれた日々。

先生の無神経な態度に苛立ちを覚えたときのこと。

この悲しみを乗り越えるのには、たくさんの孤独という”現実”がありました。

先を促すとお母さんは言った。

「「犯人・・・・・・・・ハルカちゃんだったって・・・・・・・・」

わかっていたはずだ。

だから涙も流れた。

それでも目の前がクラクラして、何かで殴られたような気がしたのは事実だった。

修学旅行はあさつてに迫っていた。

そしてハルカは修学旅行に行くだろう。

私は、どうしたらいいのかわからなかった。

【18話】（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
これからも、読んでください。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【19話】

目覚まし時計の音がうるさく響く。

現在2月12月の朝3時である。

今日は修学旅行。待ちに待ったと言っわけでは決してない。むしろ起きた瞬間ため息を

つきたくなつたくらいだ。

ハルカはくるのだろうか………

顔を見たら叫びだしそうだった。

駅には5時45分までに集合しなければならなかった。眠い目をこすり、下に降りて行くと

お母さんが起きて朝ごはんを作っていた。

「おはよう」

「早いじゃないの。もう少し寝てればよかったのに」

「でもシャワー浴びたいから、いいの」

そついうと寝不足でふらふらする身体を引きずって風呂場まで行っ

た。

熱いシャワーを浴びて眠気を吹き飛ばす。身体を洗って髪を洗う。そしてしばらくぼおっ

とした。

考えていた。これから3日間のことを。どのくらいハルカの顔を見なければならぬのだ

ろうか……。ふと時計を見るともう4時になっていた。少し長風呂し過ぎて

しまっていた。風呂から出ると朝ごはんが出来ていた。私は無言のまま食べ始める。

「お腹いっぱいだわあ。ごちそうさま」

そして制服にきがえる。再び下におりてきたときにはぎりぎりの時間だった。

「お父さん、行く。」

しばらくお父さんの車に揺られていた。

少し眠りかけたとき、駅に着いた。

「じゃ、行つてきます。」

【行つてらっしゃい。気をつけるんだぞ。】

「うん、じゃね。」

車を出たところにハル力が両親といた。宙で目線が合い、最悪な気分になる。

それから一緒に車に乗ってきたアキコと集合場所に向かった。

もちろん、ハル力なんて無視して。

集合場所に着くと、いろんな方向から「おはよう」という声が聞こえた。朝だというのに

駅は騒がしかった。

「おはよ」

「おはよう！眠くなあい？」

「うん、私もちょっと眠いかも……」

そう言うと彼女は笑った。

お決まりの出発式が始まり、やがてそれも慌しく終わった。電車がホームに入ってきた。皆

慌しく乗り込む。席に座るのはル・ル違反だったが、先生のいない車両では皆ちやっかり座

ってしまっていた。そして私もそのひとり。

あつという間に目的の駅に着いて、今度は新幹線に乗り込む。

そして今は大阪。もうすぐ奈良に着く。今日は奈良公園散策だ。自由行動というのがくせも

のだ。今のうちに一緒に散策する人を確保しておかねば。

「ってかあつという間だったねえ！」

同じ班のカコが言う。

「だねえ」。私新幹線初めて乗ったあ！なんかふわふわしてて気持ち悪いし」

私は乗り物酔いするたちだった。

「大丈夫かよお？そんなんじゃないこれから3日間やってけないよお」

カコは私のことをからかうのが楽しいらしい。そんなこんなでもうかれこれ1時間近く新

幹線に揺られている。そして私はいつの間にか寝てしまっていた。起きると奈良に着いて

いた。新幹線を降りる前にマオが「一緒に散策しよう」と誘ってくれた。これで一安

心だ。ひとりじゃなくなっただけだから。



## 【19話】（後書き）

更新、遅れてしまつて本当にすみませんでした。  
そして愛読してくださる皆さん、ありがとうございます。  
す。この度、総アクセス数が200人に達しました。  
ありがとうございます。これからも頑張りますので、  
是非読んでください。感想もいただけたら嬉しいです。

感謝をこめて

S h i e n a

## 【20話】

「うつわぁー・・・寒いよ」

新幹線を降りるなりマオが言った。寒いのが苦手ではない私は首をかしげただけだった。

「今日って奈良公園散策するだけ？」

「当たり前じゃん！本番は明日の班別自由行動なんだよぉ。今からとばしてたんじゃ

身体もたないって。トキバかだね」

「うつさいなあもぉ」

そついうとお互いのことがおかしくてふたりして笑った。

最初は絶対に行かないと決めていた修学旅行だったけど、行ってみると私もやっぱり修学

旅行を楽しむ普通の女の子だった。行かないなんて考え、やっぱり間違ってたんだな・・・

駅の団体用改札口を皆ぞろぞろと通り過ぎ、駅の前で待っていたバスに乗り込む。

私達の班はバスの一番後ろの席を陣取っていた。席を決めるときに

たまたまうちの班の班長

がじゃんけんに勝ったから。決められた時間以外おやつを食べてはいけない決まりだけれど

一番後ろの席は先生の目が届かない。だから私達はだらだらとずつとおやつを食べていた。

そうこうしているうちにバスは奈良公園の駐車場に停まった。

「あ！鹿いるよ。あっち、あっち」

皆いつせいに窓に集まる。

「まちだあー！！鹿せんべいあげなきゃだね」

「え、なんか買うと追っかけてくるらしいよ……」

「じゃあたしやめとこ」

楽しそうな会話がバスの中で飛び交う。つられて私も笑顔になった。私も鹿せんべい買う

のはやめよう。マオと買い物して、お寺観て、鹿も触ろう。いろいろと考えると楽しくて

しうがなかった。

バスを降りて散り散りになった。

私はマオと一緒に、お土産屋の並ぶあたり目指して駆け出した。途中、マオは鹿のフンを踏

んだ。それがおかしくて、私はあととになってまでずっと笑っていた。

「これ見て！この和柄の鉛筆可愛くない？」

「いいじゃんそれ！ねえ、あたしこれ買おうと思うんだけど・・・どう思うよトキ」

「奈良っぽくていいんじゃない？買ったもん勝ちだよ」

「じゃあトキもその鉛筆買って！」

「うん」

ふたり共それぞれお土産を買い、鹿を観に行ったりした。あつという間に3時間が経ち、

集合時間になった。

「そろそろ行く？」

「行きますか！」

駐車場に行くと、もうちらほらと皆が戻って来つつあった。私達はしばらくバスガイドの

ナオちゃんとおしゃべりをした。人が集まってくるとバスに乗った。

これから、2日の間泊まる旅館に向かう。

その夜、思ってもみなかったことを、私はカコから聞くことになった。

【20話】（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
次話も読んでくださいね。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【21話】

旅館に着くと送っておいた大きな荷物がごろごろしていた。

それぞれに分け与えられた部屋まで重い足を引っ張って進む。

部屋の装飾はこじんまりとしていた。京都名物のハツ橋がテーブルの上にずらりと並び、

風情のあるかけじくがその後ろに凛々しく垂れていた。

奈良公園を出て、私達2年生は京都に移った。だからこの旅館も京都にある。

部屋をノックする音が聞こえた。

「どうぞお」

誰かが言った。

「失礼します。あと10分程で夕食となりますので、大きい荷物のほう、そちらの隅のほう

に移動させてください。座布団はそちらのかけじくの下にありますんで、お好みで使って

ください。」

その男の人は必死に標準語を使おうとしていたが、私達からみれば

だいぶなまっていた。

「すごくない?!今のなまってたよ。」

「あれって京都弁??あれ?違うっけ??」

「ってか夕飯早くない??まだ6時30分過ぎたばっかだよな」

皆つなずきながらも運ばれてきた夕食をとりあえず食べた。旅館の夕食ははつきり言っ

すごくまずかった。お腹が空いていないことが、このときばかりは助かった。

夕食を食べ終わると私達はお風呂に行った。私達のクラスが一番最初だったからだ。

お風呂から出るともう時計の針は7時をまわっていた。消灯時間は10時。これから漆器加

飾の体験をする。私は八景形の小箱を選んだ。そしてそのふたの部分に大きくて真っ赤な

椿の花をえがいた。蜀紅しゅくこうと言う種類の椿だった。美術の先生はごく褒め

てくれた。プロであるおじいさんも「こりゃたいしたもんだ」と微笑んだ。そう言えば、

最初はこの漆器加飾をするために修学旅行に行こうって決めたんだ

ったな・・・・・・・・

体験時間は1時間と短く、ほとんどの人達が未完成のまま終わった。その中で完璧に終わ

った人数は凄く少なかったから、私は嬉しかった。なぜなら、私は完璧に終えることが出

来たから。

体験が終わると皆おのおの分け与えられた部屋に戻って行った。私も同じ部屋の友達と一

緒に部屋まで歩いた。部屋に入ると布団が畳み一面に敷かれていた。何人かは布団の上に

ダイブした。残りの人はおかしくて笑いとも言えないような感じで笑っていた。

「おい、消灯だぞぉー」

通路で先生が声を張り上げている。でも私達は寝る気なんてさらさららない。修学旅行の夜

と言えば、ぶっちゃけ話が定番でしょ？

「ねえねえ、何話す？」

「しっ！！聞こえるよ、ここ壁薄いもん」

「じゃあとりあえず誰かが誰かに聞きたいことをぶっちゃけない？  
聞かれた人はその質問  
に絶対答えなきゃなんないの」

皆首を縦に振って同意した。

「じゃあまずG子ね。G子の好きな人はだぁ〜れだ？」

「ええ〜困るんだけど」

「いやダメだから、ほらはよ言え？」

皆くすくす笑いながら誰かが話すのを聞いていた。

そして私の番が来た。

「じゃあ、カコに聞くね？あの事件のことなんだけ、カコってHちゃん  
と仲良いでしょ。

だからちよつと聞きたいことがあって……」

Hちゃんとは、私のことを疑っている人のひとりだ。ハルカ側の味  
方。または騙されて

いると言ってもいいかもしれない。

「うん、おっけえ。言ってみ？」

「ハルカとタクやって結局なんで別れたの？？」

「なんかね、メルとかしてもハルカが事件のことについてばあ

「っと言ったりだとか  
暗い感じの内容ばっかになってったから、タクヤが愛想つかしてふ  
つたみたい。」

????

じゃあなんであんなに一生懸命ハルカのために私のこと責めてるん  
だろう？変なの。

「じゃさ、Hちゃんってまだ私のこと犯人と思ってる？いつも普通  
に話してくれるから、  
どうなのかな？って思ってた……」

「ああ！Hちゃんはもうトキのこと犯人と思ってないよ。って言う  
かハルカのこと犯人  
って思ってるみたい。自作自演なんじゃないかって。トキの意見と  
同じこと言ってるみ  
たいだよ」

そうだったんだ。まだずっと疑われ続けていると思っていた私は、  
心からほっとして、

危うく泣きそうになった。

やっと………解決に向かい始めるのかもしれない

【21話】（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
次話もよんでくださいね。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【22話】

こうしてあつという間に修学旅行は終わった。

学校に戻ってから生活ぶりは相変わらずだった。

それでも、私は前よりも心強い気がした。

時は音も無く流れた。

そしてある日、警察の人から電話があつた。

そして私の両親が学校に呼ばれた。学校の小会議室には疑っていた人達の親がずらりと

座っていたという。そして皆めいめいに謝った。私の両親は納得こそしなかったものの

「次は私達の子供の番ですよ。先生、日程のほうは学校に任せます。必ず子供達で話し

合いをさせてください」と言ったそうだ。そして明日はハルカと1対1で話す。もちろん

ん担任の鈴木先生の立会いがあつて。でも私は気に入らなかった。私は先生に対して、

「なるべく立ち会って欲しくないです。ハルカが先生の影に隠れると思うので。そした

ら意味がありません。解決にならないじゃないですか」  
こう言っただけだ

た。なのに鈴木先生は犯人であるハルカの言い分、つまり「先生に立ち会って欲しいで

す」という意見を受け入れたのだ。これほどの侮辱ってなに？と思わざるを得なかった。

これでひとつのことがわかった。先生達は皆、”トキさんなら大丈夫” ハルカさん

は弱いけど、トキさんは強いからハルカさんの意見を”。皆口には出さないけど、その

態度から全てが見て取れた。心の奥底からふつつつと煮えたぎってくる怒りが爆発しそ

うだ。

なんでよ・・・・・・・・・・・・・・・・？

なんで私ばかり？

それでもなんとか抑えた。私が大人にならなければならぬんだ。そう、無理やり自分を

納得させた。

そして、今は明日という日を待っている。

明日、ハルカに聞いてやりたいことがたくさんあるんだ

【22話】（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。  
次話も是非読んでください。お願いします。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【23話】

一日の授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

帰りの会が終わったクラスからそれぞれ部活に行ったり、そのまま下校したりする生徒達

がどつと教室から溢れ出す。私はさっさと制服に着替えると、

「ごめん、Sちゃん。今日用事あるからちよつと先帰らせてね」

そう言い残すと走って乗降口に向かった。少しでも長く家で過ごし、緊張感を和らげてお

きたい。怖くないわけがない。怖くてしかたがなかった。もう傷つきたくない。そんな想

いが胸を満杯にする。でも行かなければならない。ちゃんと現実を知ることがどれほど大

切なことかは自分がよくわかっていた。だからその覚悟の準備の時間がたつぷり必要だっ

たのだ。

「ただいま」

「おかえりなさい」

家にはお母さんがいた。

「ちょっと考えたいから部活、休んできた」

「そう。じゃあ私は前のお店に行ってるから、ゆっくり考えるといいわ」

「わかった」

私は温かいこたつに身体をもぐりこませ、目を瞑った。そして頭の中で質問する内容を

整理していた。でもいつの間にか眠ってしまっていた。目を覚ましたのはお母さんの呼

ぶ声でだった。

「トキ、時間だよ。そろそろ行かないと。」

急いで時計に目をやると、針は5時50分を指していた。

「うん、今準備する」

制服のしわを直して、リップクリームと目薬をコートのポケットに放り込む。

「お母さん、行こ」

そして私はお母さんの運転する車に乗り込んだ。車を10分走らせたところに学校はある。

学校にはあつという間に到着した。

「じゃあ、行ってくる」

「トキ、大丈夫だからね。」

「うん、大丈夫。じゃあ行ってくるね」

「頑張つて」

お母さんに勇気付けられて、ゆったりとした歩調で職員玄関に向かう。ドアの前に立つと

インター・フォンを押して鍵を開けてもらった。校舎内に入るとすぐに鈴木先生が出てきて

『待ってたのよ』

「ハルカは来てますか」

『ええ、さっき来たわ。もう小会議室に行つて待ってる』

私は黙つたままうなずくと先生の後を歩いた。

コンコン

先生が部屋のドアをノックする。応答はなかったが、先生はかまわず入っていった。

私はそのまま廊下で立っていた。ドアの隙間から先生が顔を出し、手招きをして入るよう

にとジェスチャーで表した。静かな足取りで部屋に足を踏み入れた。

そこに、ハルカがいた。

【23話】（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます。  
次話も是非読んでください。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【24話】

部屋に入ると1つの机と3つの椅子があった。机をはさんで向かい合うようにして椅子が

2つ。少し外れたところに椅子が1つ。椅子の向かい側にはハル力が座っていた。私も静

かに椅子に腰をおろす。10分くらい、誰も何も話さなかった。しばらく経つと鈴木先生が

口を開いた。

『ええつとね、今日こうやって学校に来てもらったのはハル力さんがトキさんにきちんと謝りたいって申し出てくれたからなの』

私はそのまま下を向いていた。

先生は言い終わると黙り込んだ。謝るはずのハル力もなかなか話し出さない。

5分経った。

ハル力が口を開いた。

”トキは、今どう思ってる？”

この言葉にはかっとなった。

「どう思ってるか？むかついてるに決まってんじゃない。しかもなんであんたから質問してんの？先に話さないよ」

”話すって？？”

そういうとハルカの目は先生へと向けられた。だから先生の影に隠れるって言ったのに・・

「とばけなくてくれない？なんでこんなことやったのか、だよ」

ハルカの話す一言一言がすぐくむかっていた。

”そうだったね。なんでって言うか、皆に注目されたかったからやった”

「ふうん。楽しかっただろうね、警察まで巻き込んで。しかも手紙の頃、死ね、って書いてあったよね。自分でやってるとか、まじひくし。きもい」

一息に言うとはルカは黙りこくった。

「っていうか、なんで私だったの？」

少しずつ視界がぼやけてきた。

”なんかあ、手紙のところにトキなんじゃないかっていう話が搜してた皆の中で出てて、そ

れで皆を信じ込ませるためにも一番名前が濃かったトキの名前使ったの”

「何それ？誰でもよかったってことじゃん。最低だよ。」

”なんかそのときは自分のことしか見えてなくて、周りのこととか全然気にしてる暇なかった”

「あつそ。ハル力はいいいね、思ったとおり皆に注目されてさ、満足だったでしょ」

”ううん、皆一生懸命搜してくれたけど・・・あたしのこと本気で心配してるとは思ってなかったし”

「は？何変なことやってんの？どこまでうぬぼれてんだよ」

この期に及んで何をいうかと思ったら・・・・・・・・ここまでのひどいとは思わなかった。

”この3ヶ月間ずっとどんな気持ちだった？”

「嫌だったに決まってるじゃん。学校行くのだってめちやくちや嫌だったよ。教室行けば

あんた笑ってるし、犯人だってわかってた私にとってそれがどれだけ辛かったかあんたにわかる？わかんないでしょ。今だってそうじゃん。未だに謝らない。悪いって思ってる雰

囲気が全然ない。もうなんなの？私は今でもまだ悪者なんだよ！あ

んた学校来ないからわ  
かないでしょ」

半ば叫びながら言っていた。溢れ出す涙は頬を伝い、厚く着込んで  
きたコートにぽた

ぽたと零れ落ちた。しばらく誰も話そうとはしなかった。10分く  
らい経っただろうか。

向かい側の席から蚊の鳴くように小さくて細い音が聞こえた。聞き  
取れずに黙っていると

ハルカはもう一度呟いた。

”すみませんでした”

今度はちゃんと聞き取れた。でも返す言葉が見つからなかった。だ  
って、そのときのハル

カの顔は前のあの陽気だったときの顔そのものだったから。

ハルカは私が聞き取れなかったのだと思い、もう一度言い直そうと  
した。私は首を横に振

ってそれをさえぎった。

「もういい……………先生、今日の話し合い終わらせてください」

『いいの?』

「いいです、後日もう一回設けてください」

そういうと私は小会議室を急いで出た。少し行ったところに図書室がある。私は図書室の

ドアの前に座り込み、顔を深くうずめた。

2、3分経って学年主任の山田先生が来た。そして私の肩を軽く叩いて、「ちよつと話そ

うか」と言った。私達はそのまま図書室の中に入っていた。持ってきた腕時計に目をや

ると、すでに9時を過ぎていた。

>どうだ、ハル力さんと話してみて<

「よくわかりません。私はちゃんと謝ってもらったとは思ってないです」

>そうか・・・<

先生が一息置く。

>それでな、来週は他の男子たちと話し合いをしようと思ってるんだけども、どうだ？<

「大丈夫です」

>そうか。わかった。それと、今回のことに関してどう思うか？<

私はしばらく考えてしまった。どうと聞かれてしまつと上手い言葉が見つからない。矛盾

した答えしか頭に浮かんでこなかった。頭をひねってみたけど、結局それしか今の気持ち

は言い表せないと思い、正直に言うことにした。

「そう、ですね……なんか矛盾してしまうんですけど……  
……

こういう事件があつたことは、忘れて欲しくないんです。  
でも、私を犯人と疑つたことは、忘れて欲しいです。

本当に矛盾してるんですけど、これが私に出来る精一杯の説明です」

変な説明だと思った。

でもしょうがなかった。

先生は小さくうなずくと、「今日はもう遅いから」と職員室に電話をかけたにいった。

しばらくするとお母さんが職員玄関のところに現れ、先生方に頭をさげると私を連れて

下まで降りた。

## 【24話】（後書き）

更新が遅れてしまいました。すみません。  
読んでくださった方、ありがとうございました。  
次話も読んでくださいね。

感謝をこめて      S h i e n a

## 【25話】

翌週の水曜日

私は今学習室に独り座って待っていた。

今日は男子達話す予定だった。

怖くてなんどもため息をついた。

そして、男子3人と、鈴木先生が教室に入ってきた。

『じゃあこれから始めるわね』

私はうつむいたまま返事をしなかった。

『じゃあ、とりあえず一人一人トキさんに謝って』

とりあえず・・・？

タクヤ：《いろいろ疑ったりして、すみませんでした》

Y君：「疑ってすみませんでした」

K君：「疑ってすみませんでした」

皆、同じ言葉しか言わなかった。

でも、Y君だけは「すーいーまーせーんーでえーしーたあー」とい

う態度だった。

私は頭にきて、

「あのさ、Ｙ君は別に悪いとか思っ  
てないでしょ」

顔をあげないまま言っと

「ああ」

なんともそっけない返事が聞こえ  
体中が怒りに燃えた。

「だったらここにいらなくてもいい  
よ」

「そ？ ああじゃあ帰っていいんすか？」

そついうと先生に視線を向けていた。  
先生は何も言わないでただ下  
を向いていた。その

態度でも私は怒りを覚えた。だから  
自分が返事をした。

「いいよ」

そう私が言つとエナメルバッグをさ  
つそうと持ち上げ、乱暴にドア  
を開け教室から去って

いった。

涙が出てきた。

どうして？

だってあんたが悪いって証明されたのに、あんたは他の2人みたいにちゃんと謝ってくれ

なかったから。

もう悲しいことはごめんだ。

【25話】（後書き）

投稿が遅くなってしまってすみませんでした。  
読んでくださってありがとうございます。

感謝をこめて

S h i e n a

## 【26話】

~~~~翌日の放課後~~~~

午後の授業が終わって、部活に行く準備をしていた。

誰かが私の右肩を叩いた。

振り向くと山田先生がいた。

「はい？」

『ちよつと』

そして私達は昨日と同じように図書室に入っていた。

『さっきな、Ｙ君と話しをしてたんだよ。昨日の態度のことについても聞いてみたんだ』

「はい」

なんだろう・・・・・・・・・・・・・・・・

『だからトキさんにもいろいろとね、聞かないといけないと思ってね』

なんだ・・・

「私は、ちゃんと謝る人は許そうと思ったんです。辛かった時期は

決して短くはないけど

いつまでもつんとしててもしょうがないから、頑張つて許そうと思つたんです。でもあ

の態度！なんですか？意味わかんなかったですよ。何で私があんな風にされなきゃなら

なかったのかつて。そう思いませんか？」

『ま、確かにそう思うけどな・・・なんかさっき話したらすまないと思つてる気はあつた

みたいだぞ？』

「わかりました。じゃあ今連れて来て下さい。もうそれ以外は会いたくありません」

先生は悩んだような顔をしたけど、『よしわかつた』と言つた。そしてドアから出てくと

しばらくしてY君を連れてきた。

そして彼は謝つた。この前とは態度がガラリと変わっていた。

しばらく私は頷いているだけだった。山田先生に促されて

「わかつた。もういい。もうこれで終わり。あいつは転校するみたいだから、私もいつま

でもうだうだしたくない。もういいから・・・終わるよね」

Y君は「うん」というと、もう一度謝つた。

私は少し晴れ晴れとした気持ちになった。

「先生、もう帰ってもいいですか？」

『おお、気をつけて帰るんだぞ』

「さよなら」

家に着いたら、お母さんが台所にたって夕食を作っていた。

今日からは何も気にしないでおいしくご飯が食べられる。

結局、あのあとハルカと話し合うことはなかった。でもいいんだ。

また元の日常に戻ただけで、私は心から安心した。

平和……今ならくさい言葉などとは思わない

当たり前のようにある日々を、全部、全部大切にしてください

私以外の人が、こんな目にあわないように

今誰かを困らせてる人は、あとに得はないと思います

うるさいなんて思わないで・・・・・・・・

誰もが安心出来る日々でありますように

## 【26話】（後書き）

今まで読んでくださった方、  
ありがとうございました。

今話で最後になりました。

この春で私は中学3年生になり、  
ハルカは転校しました。

疑っていたほかの人達全員とは別のクラスになること  
が出来ました。

元担任の鈴木先生は責任を感じて、この春から一年間  
早稲田学院大学に指導関係のことを学びに行きました。今、私の周  
りにはいい友達でいっぱいです。

そのことだけが言いたくて、長くなりました。  
それでは皆さん元気で。

本当にありがとうございました。

感謝をこめて      S h i e n a

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3707a/>

---

濡れ衣

2011年1月16日01時32分発行